

こしえるびと

つむぐストーリー vol.85

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。
“黄金の郷”いわて平泉を支える、魅力溢れる“こしえるびと”の
メッセージをシリーズで紹介していく。

野球一筋から就農へ

花泉町の金流川沿いに広がる田園地帯。子牛の甲高い鳴き声が響く中、我が子を見守るよつに子牛に寄り添い、育成する千葉亮介さんがいる。

子どもの頃から野球一筋。プロ野球選手を夢見ていた亮介さんは、高校卒業後に社会人野球チームへ入団。ピッチャーとして活躍したものの肩を故障し、野球を諦めざるを得なかった。帰郷後は市内の住宅関連資材取り扱いメーカーに就職。営業マンとして働いていたときに結婚して妻の実家に入った。「結婚した時から就農する将来像は見えていた。生まれも育ちも農家ではなく、農業経験はゼロ。でも野球で培った体力はある」。亮介さんは就農することを決断し、勤めていた会社を退職。農業の道へ歩みを進めた。

義父に習い先輩から学ぶ

これまで牛を見たことも触ったこともなかった亮介さんは、新米和牛繁殖農家として義父の稔さんの作業を手伝い、見よつ見まねで少しずつ技術を習得した。子牛が高値で売れるよう、飼養管理を勉強しながら試行錯誤を繰り返す。特に子牛の胃腸は未発達なため、管理が難しく気を使う。市場に出荷するまで気を抜けない。

J A 畜産課職員から声を掛けられ、畜産農家で子牛の鼻紋を採取する子牛登記の手伝いを始めた。繁殖農家に出向いての交流は、早く地域になじみ、自分自身を知ってもらうチャンス。「先輩たちがどんな管理をしているのか直接聞くことができ、とても勉強になる」と積極的に足を運ぶ。米の収穫期には集荷の手伝いを買って出るなど、農家との交流を大切に、多

くのことを教わっている。

信頼されるよう

成長していききたい

子牛が高く売れた時に繁殖農家としてのやりがいを実感する。「全国の購買者はもとより、地元の人たちから信頼され、買ってもらうようになりたい」。義祖父から義父が受け継いで頭数を増やしてきたように、義父や先輩たちのノウハウを参考にしながら自分のやり方を見つけ、さらに増頭していくことが目標だ。

「先輩たちから教えてもらっているから成長できている」と感謝する亮介さん。「先輩ができたなら今度は自分が教える立場になって、引っ張っていけるようになりたい」とさらなる成長を誓う。

信頼される繁殖農家を目指して

花泉町老松 千葉 亮介さん



PROFILE

千葉 亮介さん (32)

Ryosuke Chiba

花泉町老松

1988年一関市生まれ。一関学院高校で甲子園に出場し、卒業後は埼玉県内の企業の社会人野球チームでプレー。退団を機に帰郷し、2011年に農家に婿入りする形で結婚。16年就農。親牛28頭、水稲10畝、ホールクropp (WCS) 7畝、牧草地6畝。妻、子3人、父、母の7人暮らし。

